

ララ救援物資の多面性と社会的意義

—研究マトリクス図の構想—

○ 常磐大学 西田恵子 (会員番号 1970)

キーワード：ララ救援物資・LARA・戦後混乱期

1. 研究目的

第2次世界大戦後、日本への支援として送られたララ救援物資の意義について社会福祉の領域で明らかにすることが研究全体の目的である。

ララ救援物資は、第2次世界大戦後、戦災国である日本にアメリカの民間団体 Licensed Agencies for Relief in Asia (アジア救援公認団体、通称 LARA、以下「LARA」という。)が送った物資である。既存の様々な社会システムが崩壊した戦後混乱期、戦中戦前からの要援護者は一層厳しい状況に置かれ、さらに戦災によって生存、生活に困難を来した者達が膨大な数ともなり、救済を要する層は飛躍的に増大していた。しかし社会福祉の諸制度は未整備であり、公的な保障もいきわたらない状況が続いていた。そこへの海外からの救援であった。救援物資の量は、救援物資が積まれた第一船が日本へ着いた1946年11月から1952年6月の終了まで、計458船、食糧・衣服・医薬品・靴・石鹼・布地・綿など総量約3,300万ポンド(約15,000トン)、当時の金額にして1,100万ドル(邦貨で400億円)に相当する規模になる。また、その配分先は児童施設、老人収容施設、結核・癩施療施設(当時の名称を用いる)をはじめ、ミルク・ステーション、戦災者引揚寮、病院など施設が多くを占め、配分対象となった施設の数は約5,500にのぼった。GHQ、日本政府が関わり、要援護者を対象として進められた大規模なこの救援活動だが、社会福祉領域での研究は多くない。『月刊社会事業』『月刊福祉』による何件かの記事、厚生省の『ララ記念誌』(1952年)、多々良紀夫の『救援物資は太平洋をこえて 戦後日本とララの活動』(1999年)が主なものである。ただし、ララ救援物資についての著作等がその他に全くないわけではない。戦後の青少年世代には「脱脂粉乳」「給食」などの記憶につらねて語られる事象であり、戦後70年という時期にあって当時を回顧する催し等でララ救援物資が取り上げられることもある。概してそれらはララ救援物資に関わる一側面に關心を寄せ、述べるものだが、それが大局的にはどのような位置を占め、意義をもつものであるかは不明瞭なものとなっている。

本発表はそのような問題を念頭に置きながらララ救援物資がもつ多面性に着目し、ララ救援物資の社会的意義を検討する上で求められるフレームワークの試案を示すものである。

2. 研究の視点および方法

ララ救援物資に関わる著述は全国社会福祉協議会、厚生省、多々良紀夫による社会福祉領域のもの、他、栄養領域、日系移民領域、メディアコミュニケーション領域のものがある。本研究は社会福祉領域におけるものであるが、社会福祉の根幹となる生活問題に直接にも間接にも関係があることから、他領域を含めた先行研究の掘り起こし及び把握を行う。また、自治体及び社会福祉施設等から収集したララ救援物資に関わる各種資料及び情報を吟味し、ララ救援物

資に関わった主体を抽出する。この一連の作業を通じて、ララ救援物資に関わる研究のマトリクス図を作成し、今後のララ救援物資に関わる研究の一助にする。

3. 倫理的配慮

文献、資料の引用にあたっては出典を明らかにし原典主義を貫いている。また、研究の過程で証言を得る際には、協力者の名誉やプライバシー等の人権を侵害することがないように十分な配慮を行うとともに、把握の内容については本人による確認と承諾を行っている。

4. 研究結果

ララ救援物資は食糧・衣服他、様々な物資を総称するものである。その内容は具体的にどのような品目、質、量で構成されているのかという内容の精査、分析という研究課題をとらえることができる。そして、物資を核として、物資を提供される側と物資を提供する側のそれぞれの様相に研究課題を求めるという方途がある。

物資を提供される側については、救援物資を配分される要援護者そのものの状況、要援護者等を支援する社会福祉施設等、専門機関・団体の状況、要援護者が居住する地域の困窮の状況、戦後復興の社会情勢との関わりにおいてどのような意義をもったのかということなどに研究課題を見出すことができる。

物資を提供する側については、物資を送る主体の詳細な検討が考えられる。LARA という組織の設立経過、LARA 構成団体の組織基盤、LARA 構成団体の参加動機、LARA 構成団体の活動実績、LARA の運営経過、LARA 代表等キーパーソンの活動経過、物資提供者の参加動機などである。また、多々良は LARA の母体が ACVAFS であることを明らかにした(1999)が、この ACVAFS の詳細な検討も同様にあげられる。さらに、日系移民がララ救援物資の提供に関わったという事実も、LARA との関わりやアメリカ社会での位置づけ等との関連で研究課題にすえることができる。

ACVAFS は日本への救援活動に先立ち、ドイツに対して救援物資を送る活動を行っている。同じ組織による敗戦国支援という点で共通性と差異を検討することは意味があると考えられる。また、LARA は韓国への救援活動も行うこととなっていた。その実態把握と日本との比較検討も研究課題にあげることができよう。

以上を反映した研究マトリクス図は学会当日に配布する予定である。

5. 考察

ララ救援物資を中心にすえ、提供される側と提供する側のそれぞれを詳細に把握、分析していくと、横断的な検討課題が顕在化してくる。たとえば、提供する側と提供される側とを結びつける運営管理がどのように構築、実施され、変遷を辿ったかということである。あるいは、LARA 以外の様々な海外からの戦災地救援活動及びその組織との比較検討も LARA の固有性や普遍性を検討する上で有意義なものとする。ララ救援物資は様々な研究課題の設定が可能であり、研究の展開が可能なのである。それがゆえに研究のマトリクス図を描くことは重要だといえる。

ララ救援物資の研究を拡大していくことは戦後混乱期当時の社会福祉の全体像をつかむことにもつながる。社会福祉のマクロ環境がいかに関与者に支援に影響を持つかということなど、ララ救援物資の研究を通じて得られる社会福祉研究の視座、枠組みに関心を払い引き続き研究に臨んでいきたい。